
Missing ~ この想い ~

佐野-SaNo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Missingこの想い

【コード】

N3085Z

【作者名】

佐野・Sano

【あらすじ】

あなたは、この物語の意味がわかりますか？

Episode・？（前書き）

突然、それは起こった。

友人が行方不明に。

町の人数が段々と減り始める。

そして、国内から世界の人や動物たちもみんな、消えていく。

この世界で、何かが起こり始めたんだ。

Episode・? ?

「ノボルっ！」

翼は、自分の声で目が覚めた。

心臓がバクバクと脈打っている。額からも大量の汗が流れていて、呼吸する感覚さえも分からない。

恐い。

翼はすぐ隣りで寝ているはずの竜の姿を確認した。

「俺はここにいるぜ」

声を上げた翼の寝言で起きたのだろう。

顔を合わすと竜はそう口にした。

大丈夫。竜は、いる。

落ち着きを取り戻した翼は部屋から出て台所により、冷蔵庫の中にある水の入ったペットボトルをコップに入れて飲む。

「ふあ〜」

竜も起き始めて茶の間にあるソファーに座り、テレビの電源を入れた。

ザー。ザー。

チャンネルを切り替えるたびにノイズ音が聞こえます。

もう、テレビも使い物にならない。

ペットボトルの水も残り少ない。食糧だって……。

無くなればそこらへんにあるコンビニで確保すればいいと思ってたが、同じ考えの人が沢山いたようだ。

コンビニは荒れ果てていて、食べるものも食えたもんじゃない。

コンビニ以外にもスーパーや民家、そこら辺の建物はほとんどがガラスなどが割られていて、酷いありさまだった。

今日は、水曜日。

普通なら今頃は学校で授業を受けているはずなのだが、そんな状況ではない。

改めて今の状況を確認する。

始めにクラスの友達が行方不明になり、親が搜索願を届けたが結局は見つからず数日が過ぎた。

次に同じ学校の違うクラスの子も行方不明になり、それから三日もしない内に次々と周りの友達や知り合いが姿を消し、親までもが消えた。

テレビでも報道されていたが、これは世界で起こっているようだった。

俺と親友の竜は、運が良かったのか今まで消えないですんだ。

もう町には俺らだけだろう。

「なあ、翼。これから本都ホントに行ってみないか？」

突然、竜がそう口にした。

「本都に？」

本都とは、この国で一番の人口を誇る大都市だ。人口の数は約2500万人と言われている。

考えたこともなかったが、もしかしたらそこにはまだ人が沢山いるかもしれない。

「どうする？」

竜が訊く。

「別に行ってもいいが、行き方はどうする？ 電車も出てないし、車を動かすつても……」

「自転車があるだろ」

「本気がよ!？」

「ここですつとこうしてるわけにもいかないだろ？」

「うーん。仕方ないな。今すぐ準備しよう」

「了解」

俺たちは本都へ行く準備をし、家を出た。

Episode ？ ？

「多分、もう本都には入っているはずだ」

ブレーキを掛けると、手にした地図を開いて竜が口にする。

あれから3時間。

ずっと座っていたからか、お尻が痛い。それに足も疲れてきている。

翼は辺りを見渡し、本都の様子を眺めた。

「ここが本都か……」

住宅が多いというのは分かった。

しかし、ここにもやはり人はいない。

「町の中心に行ってみようぜ」

竜に言われるまま、大きな荷物を背負いながら翼はその後ろについていく。

もうすぐで午後4時だ。寝泊りする場所はどうしようか？

人がいないからといって勝手にホテルなどに泊まるのは許せるものではないが、今日のところは仕方ない。

辺りの様子を確かめながらついていく。

やがて、大きな建物や通りが見えてきた。

「竜！　ここって一体どこだ!？」

翼は少し距離がある竜に声を上げて訊く。

「もう中心まで来てるはずだ！　って、えっ?」

竜はいきなりブレーキを掛けた。

「危ねッ！　なんだよいきなり!？」

「おい……、こじ……」

竜は歩道を走っていた左側の通りを見つめ出す。その表情は、驚いている。

それにつられ、翼もその通りを見ると、入口上に看板が掲げられていた。

円舞町一番街。

翼は言葉を失った。

初めて来たからではない。

そこが一番有名な場所だったからこそ何も言えなくなったのだ。

そこには、人の姿が一人も見当たらなかった。

この国には、もう俺たち以外に誰も存在しないのではないか？

そんな考えが過った。

Episode . ? ?

俺たちはあれから寝泊りする場所を探すために、ホテルを探した。

そして見つけたのが高さ250メートルもある、ホテル・カールン本都。

上から見渡したら人が見つかると思ったんだが……。

翼は竜のいる部屋へ向かった。

「どうだった？ 人見つかったか？」

「いや。人以外に町も空気も雲すらも動いてないように見えた。まるで時間が止まったようにな」

「……そっか」

「ところでお前、何食ってんだ？」

「え？ 厨房にあったものだけ？」

「だけ？つてお前なあ……」

自分の中では納得がいなくても、もう仕方がないと言えない。

こんな世界になっちまったんだから。

食料は生きていく中では多分大丈夫だろう。

しかし、問題はそれではない。

俺たちがいつ消えるのかが問題なのだ。

辺りは夜になり、俺たちは一つのベッドで横になる。

「夜は来るんだな」

竜がそう口にする。

「時間が動いているだけマシだろ？」

「……なあ、翼」

「無視力ヨ」

「俺たち、明日もあるんだよな？」

「……」

「消えた人たちって、今どうなってんのかな？」

「やめるよッ！ その話は、やめよっぜ……」

「悪い」

翼は窓の方へ身体を向かせ、目を閉じた。

「なあ、翼」

「今度は何だ？」

「……手、つないでもいいか？」

「はあ!?!」

「いや、その方が安心できるだろ？」

「そ、それはそうだが……。背中を合わせるのじゃ、駄目か？」

「おう。それでいいや!」

二人は互いに背中を合わせ、互いの存在があることを確認して眠りに入った。

Episode・? ?

ジリリリリリリリッ! ! !

その音にビクリして、翼は飛び上がるように起きた。

タイマー付のベッドとはどこもこんなものなのだろうか……。

窓から朝日が差し込み、腕を大きく上げて深呼吸する。

「朝だぞ。竜」

翼はそう言って、隣りで寝ている竜の姿を確認する。

寒がりなのか、竜は布団の中に潜っていた。

「早く起きれよ。これから……」

言いながら布団を退かすと、枕がその形を作っていたらしく、竜の姿はなかった。

「竜っ!」

俺は部屋の中を探した。トイレ、バスルーム、クローゼット。

見当たらない。

部屋を出てホテルの中を探し回ったがやはりいない。

もしかしたら、部屋に戻っているかもしれない。

急いで部屋に戻ってみると、そこに竜の姿が……………ない。

「どこいったんだよ……………、ノボルっ!!」

翼は膝が崩れ、必死に竜の名前を何回も叫んだ。

しかし、竜が戻ってくることはなかった。

「あ…ああ……………。あゝ……………ッ……………」

涙も、鼻水も止まらない。

俺はこれからどうしたらいいんだ？

なぜ俺だけが残されたんだ。

一人だけ取り残されたっていうなら、死んだ方がマシだ。

そんな思いがわき始めたときだった。

「これ、使ってください」

誰かがそつと声を掛けてくれた。

優しい声。

目の前から聞こえた声の方へ顔をあげる。

そこには、ハンカチを差し出している同年代くらいの女の子の姿があった。

驚きのあまり数秒間、何も考ええなかった。

我に返ると、翼は差し出してくれた女の子のハンカチで涙を拭く。

「女の子の前で涙見せる俺って情けないな」

「いえ。勝手に部屋へ入ってきた私も悪いですし、それに……。私だつて丸一日泣いてましたから」

女の子は笑って言う。

「あの、あなた名前は…?」

「私は、佐野さのと言います」

「佐野さん……。あ、俺は翼と言います」

そう言うと、女の子は笑顔で返事をした。

「でも、どうして佐野さんはここに?」

「私は睡眠をとれる場所を探していたんです。家にいるのが怖くて……。それにここは一番高さのある建物でしたのでここにしようと思っ
めたんです。上から見渡したら誰かいるかなって。そしたらこの部
屋から声が聞こえたもので」

「そうだったんですか」

なんとなく泣いていた自分を見られたときの恥ずかしさが込み上が
ってくる。

「翼さん。これからどうしますか?」

女の子は真面目な目で見つめて訊く。

「俺は、親友の竜ってやつを探す。多分あいつはまだここに、この

世界にいるはずだから」

そう信じたい。

だからこそ、勝手に口からそんな言葉が出たのだ。

竜は、必ずどこかにいる。

俺たちはホテルから出て、他にも人がいないか本都を探し歩くことにした。

Episode . ? ?

本都に入ってから5時間が経過する。

辺りはすっかりと闇の世界になってしまった。

町の灯りなんて点くわけもなく、予備の懐中電灯で辺りを捜し歩く。

「あの、翼さん。そろそろホテルに戻りませんか？」

辺りが暗くなっただからか、佐野という女の子がそう口にする。

「いや、俺は竜を捜す」

「でも……」

佐野は何か言いたかったようだが、それを口にするのをやめた。

「翼さんは、友達思いなんですね」

「当たり前だろ。あいつは俺の一番大切な親友だ」

「……………です」

佐野は小さな声で何かを呟いた。

「ごめん、聞こえなかった。もう一回言って」

「いえ、何でもないです」

「…そうか」

再び、人を捜し歩こうと足を出したときだった。

「翼さん」

今までとはちょっと元気のない声で佐野は翼の名前を呼んだ。

「どうかしたか?」

「あとは、一人で頑張ってください」

「えっ?」

言葉の意味がわからず、翼は佐野の方へ振り向いた。

すると、佐野が持っている懐中電灯が切れかけていた。

「多分ですけど、この電気が消えたら私もいなくなると思いますが。でも、翼さんなら大丈夫ですよ。頑張って竜さんを見つけてください」

「何言ってるんだよ！ 今他のやつ探すから耐えてくれ」

翼はバッグの中をかき回す。

逃げ。逃げ。

焦りのせいかな、もう一つ予備に入れていおいた懐中電灯が見つからない。

「……………」

探している最中、ボソツと声が聞こえたような気がした。

だけでも翼は、どこにあるんだと必死にバッグの中を自分の懐中電灯で照らしながら、かき回す。

あつた
！

「おい、あつたぞ！」

翼は見つけた懐中電灯をすぐに佐野の方へ渡そうとした。

だが、そこにはもう人の姿はなかった。

地面には電気の切れた懐中電灯が転がっている。

遅かった。

なぜ……。

翼は、自分一人だけが取り残される悲しみに耐えられなくなり、
この世界に存在できる一つの灯りを自らの手で消した。

また、次の世界で会えるさ。

END

Episode・？（前書き）

突然、それは起こった。

ここは、科学の世界だったはず。

普通に生活していた俺たちは、魔法を使えるようになった。

俺たちは、夢の魔法使いになれたんだ。

そう叫び声が聞こえて、翼は急いで窓を開けた。

ヒュンツ。ガシャーンツ！！！！

風の切る音と同時に部屋の中が荒れ果てた。

「イッたーい。もう、あと少しで大惨事になるところだったよ」

いや、もう大惨事だよ。

窓から部屋へ侵入したそいつは、美咲みさきと同じクラスの女の子だった。

「あ、翼おはようー！」

「何がおはようだ。まずは先に人の部屋をめちゃくちやにしてすい

「ませんと謝るのが先だろ」

「すみません。はい、謝った!」

「お前なあ」

「だって仕方ないよ。私、まだ自分の魔法に慣れてないんだもん」

「酷い言い訳だな」

翼は部屋の中を見回し、崩れた本棚や散らばった置物などを見つめて右手を前に出す。

すると、その右手から紫色のオーラが発して見つめたものが元の位置へ戻っていく。

魔法ってのはこういうときに便利だな。

俺たちがこうやって魔法が使えるようになったのは、よく分からない。それは突然だったからだ。

しかし、念じれば必ず叶う魔法ではなく、それぞれ人によってタイプというものがあるらしい。

「翼、早くしないと遅れるよ！ あんた遅刻多いから私が迎えに来てあげたんだからねっ！？」

「それはどうも。でも、今どき箒に乗るってのはダサいだろ」

「女の子はみんな箒よ！ 憧れなんだから」

「そうかい。でも俺は歩きでいくよ。お前の運転は見てて怖いからな」

「なによ、失礼ねえ」

翼は学校へ行く準備をして、美咲と一緒に学校へ向かった。

Episode . . . ?

人々が魔法を使えるようになったというのに、授業の内容は何一つ変わらない。魔法に関係のない話ばかりだ。

4時間目の授業が終わり、昼休みに入ると隣りに座っている姉貴的存在の飛鳥^{あすか}が翼に声を掛ける。

「翼今日元気ないねえ？ どした？」

「朝から酷い目にあって疲れているだけだ」

「だからごめんって、さつき謝ったでしょ？」

翼は机に伏せながら飛鳥に話すと、それを聞いていた前の席に座っている美咲が口を開いた。

「一体何があったん？」

飛鳥は美咲の顔を見つめて訊く。

「え？ あはは。ちょっと翼を迎えに行こうとしたんだけどね、上

手く魔法が操作できなくて翼の家に突っ込んだっていつか…
…」

「はああー。そりゃ散々だったねえ、翼」

「だろ？」

「でもあんたの魔法ならすぐ元に戻せたでしょ？」

「こいつ、簡単のようにつげ。」

魔法を使うのは簡単だが、体力を使うことが難点なのだ。

「まあ、な」

「それより、お弁当買いに行かない？」

美咲が話を切り替える。

「私はいいけど、翼はどする？」

「悪い。俺ちよつと用事あるんだ」

翼はそういって、教室を出て図書室に向かった。

借りていた本を返さなくちゃいけない。

図書室につくと、部屋の中を見回す。

窓際に一人の女の子が座っている。

翼はその女の子に近づいて、声を掛けた。

「佐野^のさん。この本貸してくれてありがとう。すごく面白かったよ」

そういつて返した本は、図書室にはない本だ。

すると、佐野という女の子は笑顔でその本を受け取った。

「良かったです。面白く読んでいただけ」

「俺、そういうミステリー系にファンタジーが入ってるものとか好きなんだよね。なんていうか、読んでいて飽きないんだ」

「はい。私も翼さんと同じです」

「あのお、もし良かったら他の本も……」

話している最中、ゴゴゴゴという音と共に足元が揺れ始めた。

地震
！？

外から地面を砕くような轟音が聞こえる。

揺れでふらつきながらも窓のそばに寄り、外の景色を眺めた。

何かが、空に突きあがっている。

揺れが治まり、翼はその何かに目を凝らす。

黒く、太い棒状のようなものが何本も天高く地面から突きあがっていて、それはこの学校を囲んでいるようだった。

「檻のようですね……」

「檻……？」

隣りで見ていた佐野がそう口にした。

その時、どこからか機械声のアナウンスが入りだした。

『突然ですが、今カラコノ校内ニイル皆サンニ、殺シ合イヲ、始めテモライマス。』

ルールハ、一ツ。最後ニ残ツタ者ガ勝者トナリ、ココカラ出ラレ
ル権利ガ与エラレマス。』

デハ、今カラ開始デス』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085z/>

Missing ~ この想い ~

2011年12月12日00時48分発行